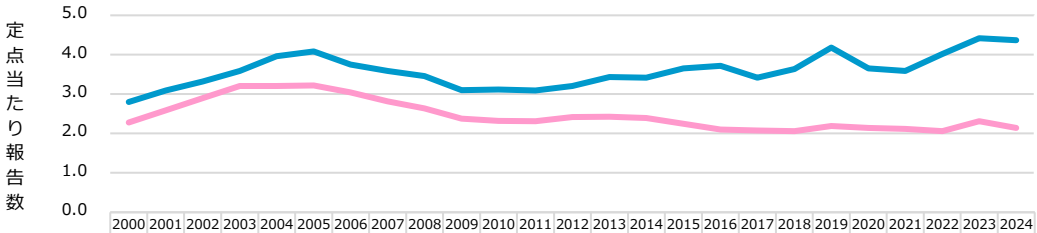
尖圭コンジローマの発生動向、2024 年

国立健康危機管理研究機構
国立感染症研究所　応用疫学研究センター
同　感染症サーベイランス研究部
同　実地疫学専門家養成コース（FETP）
2025 年 11 月 15 日現在
（掲載日：2026 年 4 月 28 日）

尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス（Human Papilomavirus：HPV）6、11 型などのウイルス感染を原因とし、生殖器等に隆起性の病変を作る疾患である。尖圭コンジローマは、感染症法の５類定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されており、性感染症定点医療機関数は 2007 年以降 1000 弱でほぼ横ばいである。性感染症定点医療機関では医師が「症状や所見から尖圭コンジローマが疑われ、かつ、届出のために必要な臨床症状（性器及びその周辺に淡紅色又は褐色調の乳頭状、又は鶏冠状の特徴的病変）により、尖圭コンジローマ患者と診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届け出ている。

感染症発生動向調査における尖圭コンジローマの定点当たり報告数は、男性では 2005 年をピークに減少したが、2012 年以降は増減を繰り返しながら漸増していた。女性では 2005 年をピークに減少し、2016 年以降は概ね横ばいであった（図 1）。

図 1．感染症発生動向調査における尖圭コンジローマ定点当たり報告数、2000～2024 年

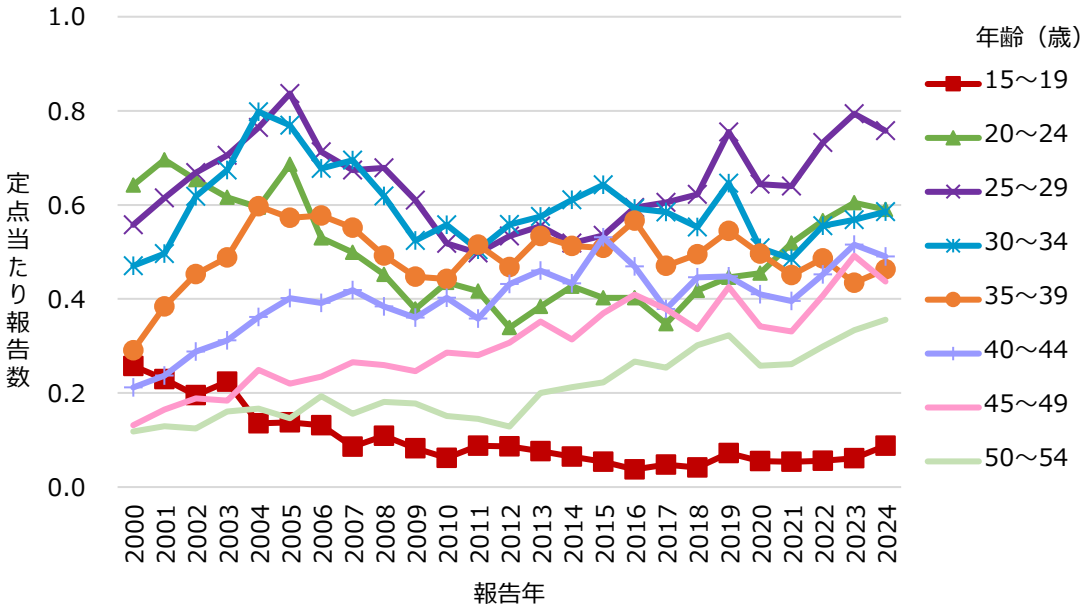


	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
男性	2.80	3.09	3.32	3.59	3.96	4.08	3.75	3.59	3.46	3.10	3.12	3.09	3.21	3.43	3.42	3.65	3.72	3.42	3.64	4.18	3.66	3.58	4.02	4.42	4.37
女性	2.28	2.59	2.90	3.21	3.21	3.22	3.04	2.82	2.64	2.38	2.32	2.31	2.42	2.43	2.39	2.25	2.10	2.08	2.06	2.19	2.14	2.11	2.06	2.31	2.14
定点医療機関数	897	911	917	920	916	931	946	968	971	961	965	967	971	974	975	980	985	988	984	983	981	983	983	984	981

報告年

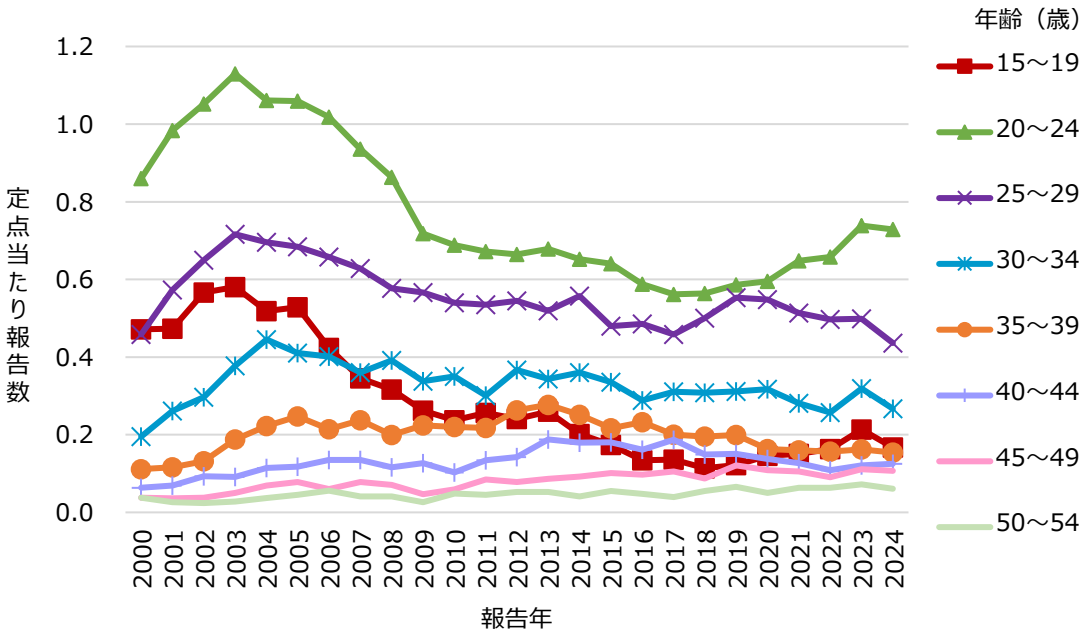
５歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では 20 代から 30 代前半が多かった。20 代は 2012、2013 年頃から、40 代は 2000 年から、50 代前半は 2013 年から、増減を繰り返しながら漸増していた。10 代後半は 2020 年以降概ね横ばいであったが、2024 年は増加した（図 2）。

図 2.　男性の年齢階級別尖圭コンジローマ定点当たり報告数、15～54 歳、2000～2024 年



女性の年齢階級別定点当たり報告数は、20 代、特に 20 代前半が多かった。2010 年頃から、20 代後半から 50 代前半は概ね横ばいだった。10 代後半から 20 代前半は 2019 年以降増加していたが、2024 年は減少した（図３）。

図 3.　女性の年齢階級別尖圭コンジローマ定点当たり報告数、15～54 歳、2000～2024 年



尖圭コンジローマは HPV ワクチンで予防可能な疾患であり、HPV ワクチンの効果を見積もる際に尖圭コンジローマの発生動向を活用している国もある。若年男性における HPV ワクチン接種への助成を開始した自治体もあり、今後もサーベイランスの解釈に注意しながら、発生動向を監視していくことが重要である。